

KELES Newsletter

関西英語教育学会
ニュースレター

2005年(平成17年) No.4 10月号

事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL:075-466-3261(直通)

E-mail: keles@infoseek.jp

編集発行: 関西英語教育学会(KELES)

立命館大学産業社会学部 吉田研究室内

FAX:075-465-8196 (大学事務室)

Home Page: <http://keles.hp.infoseek.co.jp/>

第9回研究会・総会報告、新役員、新入会員、今後の大会予定、理事・事務局全体会の報告

さらなる前進のために 第9回研究会を終えて -

会長 瀬川 俊一(京都府立大学名誉教授)

このニュースレターが会員の皆様方のお手元に届く頃は暦の上では寒露ですのに、実際の季節感とは大きな落差を感じる日々です。会員の皆様方がお元気に活躍の日々を想っています。

5月28日・29日の研究会が盛会裏に終了して4ヶ月間が経過しました。諸般の事情で遅延いたしました研究会報告を本号で行っています。参会された会員の皆様方には研究発表等の再学習に、参会されなかった会員の皆様方には2日間の発表内容の学習に、活用していただけることを願っています。

研究発表や講演等を限られた字数で簡潔にまとめるためにご尽力くださった会員の皆様方にお礼を申し上げます。有難うございました。

9月5日の本学会理事・事務局合同委員会で、今後の活動方針について審議いたしました。

1. 来春の研究会を本学会第10回記念大会にふさわしい企画にすること、
 2. 10周年記念事業の大綱を本年中に策定すること、
 3. 学会事業の電子化を検討すること、
 4. 地区別セミナーの再検討、
 5. 規程の全面的な見直しをすること、
 6. 卒論・修論研究発表セミナーの継続、
- 等が主たる検討課題でした。

いずれも、本学会が発足以降、着々と積み重ねてき

た実績を継承し、更に発展してゆくために必要な検討課題です。会員の皆様方からの積極的な意思表示をお待ちしています。理事・事務局委員まで忌憚りの無いご意見をお寄せくださいますようお願いいたします。既に確定した情報につきましては、本号に掲載されていますので、ご確認下さい。

教育改革が急速に進行中です。本学会が今後も会員の皆様方の研鑽に役立つ学会であり続けるためにも、会員相互の連携・情報交換を密にして、英語教育・研究の進展に寄与し続けようではありませんか。会員の皆様方のご発展・ご多幸を祈念しながら。

第9回研究会報告

今次の大会は、京都市教育委員会および京都府教育委員会の後援を受け、5月28日(土)・29日(日)の2日間にわたって、同志社大学今出川キャンパスにおいて開催された。赤松先生のご尽力のおかげで会場として使わせていただいた寒梅館の教室は、通常 Law School と Business School に使われており、アカデミックな会場環境のもとで、延べ350名の参加者が活発な研究活動(実践報告8件、研究発表22件、ワークショップ3件)を行った。大会2日目には、高見健一先生を迎えて講演が行われ、引き続き織田稔先生、赤野一郎先生、山本英一先生によるシンポジウムが開催され、充実した2日間であった。

第1日(5月28日)

研究発表・実践報告

第1室 司会・報告 有本 純(関西国際大)

1. 「授業におけるディクテーションの効果的な活用法」

加藤雅之（神戸大）

集中力がつき、英語の総合力につながるディクテーションの効用を概観し、次に授業での改善として、WEB フォームと Excel を利用した一覧表を提示することで、書取の状況が容易に比較できることを紹介した。これにより、何をどう間違えたかではなく、なぜどのような間違いが多いか一目で分かる利点があることを指摘した。結果として、学生による評価も良かった。

2. 「NEW HORIZON を使用したフォニックスの指導」

居戸厚子（京都市立梅津北小・非）

教科書の単元に沿ってフォニックスのルールを簡単なものから順に扱い、新出・既出の語だけでなく必要に応じて未習語も含めて、アクティビティを通して発音指導をした小学生対象の実践報告である。フォニックスかるたとり、虫食い、ナンセンス文等で母音や子音の練習をするだけでなく、リズムや音調を指導する為に教科書の昔話を利用する。また、実際に指導する際の工夫についても提案があった。

3. 「日本人英語学習者の音読不安とその要因に関する研究」

飯島 梢（富士通テン）、竹内 理（関西大）

2 種類の予備調査によって、1) 教員は音読を授業で採用しており、その有効性を認めている。2) 生徒は自分の発音や訂正されること等に対して不安を抱いていることが判明した。本調査では、高校生を対象に集団音読不安および個別指名音読不安について各々の因子が抽出された。特に、読み方に関する不安因子が多く抽出されたことから、この面での指導の重要性が指摘された。

4. 「シャドーイングの中学英語教育への応用 — 中学 2 年生における実践研究 —」

望月 肇（神戸国際中・高）

中学生に 1 ヶ月で 13 回の授業で、各回 20 分を使つてのシャドーイングの効果を検証した実践報告である。普通教室と LL 教室を併用し、シンクロ、プロソディ、コンテンツシャドーイングなど 6 つのステップを段階別に実施した。結果として、実験群と統制群

のリスニングテストの成績、および事前事後の成績にも有意な差が認められた。ただし、英語が苦手な生徒に対しての対応が課題となった。

第 2 室 司会・報告 吉田晴世（大阪教育大）

1. 「児童英語リカレント大学院と小学校のコラボレーション！ だれもが学習者として」

横田玲子（神戸市外国語大）

稲岡ひとみ（神戸市外国語大・院）

2004 年度に神戸市外国語大学で小学校教員、中高の英語教員のための大学院リカレントプログラムがスタートし、そのなかの児童英語コースでは、公立小学校の英語活動へ積極的に参加しその過程で学んできたことが報告された。例として、サンドイッチ作りを通じて、Authentic な英語活動が如何に重要であるかということを解説された。

2. 「京都市小学校英語活動研究会のつながりを生かして」

中井厚子（京都市立嵯峨小）

京都市総合教育センターのカリキュラム開発支援センターのメンバーとして活動をしながら、勤務している小学校の英語活動の基礎づくりを試み、平成 14 年 11 月に京都市小学校英語活動研究会が設立され、研究会のつながりから生まれた英語活動のいくつか報告された。例として、ALT の先生へのお別れのメッセージカード作りの成果をビデオで紹介された。

3. 「公立小学校における英語教育のあり方について カリキュラムと教材の試案」

木村佐和子（立命館大・院）

公立小学校における英語教育の導入過程やその位置付け・実態を報告され、現状分析や先行研究の結果から見えてくる小学校英語教育の問題点を指摘された。そして、それらの問題点を検討し、カリキュラムの改善と PC 利用による教材の試案が提案された。

4. 「小学生のリスニング能力（小学校で英語活動を経験した生徒の英語を聞き取る能力）」

中島正恭（八幡市立男山東中）

小学校で継続的に英語教育を受けた生徒と英語活動をほとんど受けていない生徒の間に、英語の聞く能力において差があるのかを明らかにするために、中学 1 年生を被験者としてリスニングテストを実施し、その結果と考察が提示された。2 つのグループの間に有

意な差は見られなかったが、週1時間の英語活動は生徒の聞き取り能力の向上に効果がないことを示している可能性が指摘された。

第3室 司会・報告 清水裕子（立命館大）

1. 「中学校英語科における指導と評価の一体化に関する実践」

高木浩志（宝塚市立高司中）

絶対評価の導入から2年目を迎えた中学校の英語科における実践と現状が報告された。研修会等を通じて、短期間の内に多くの努力が払われ、評価基準表の作成や具体的な評価方法の検討で、より良い評価活動への方策が練られてきた。しかし、現場において、少なからぬ混乱があるのは否めない事実であり、今後、指導と評価の関係を検討し、形成的評価や相対的評価などの観点からの取り組みが期待される。

2. 「大学薬学部6年制導入に向けての新薬学英語教育への提言」

倉本充子・末弘 美樹（広島国際大）

大学薬学部の6年制導入に伴い、そのニーズや目的との関係からも、薬学部の英語教育においてESP教授法の展開が期待される。本発表では、これからの薬学教育における英語教育のあり方を提言するための第一段階として、全国55の薬学部のWEB上のシラバスやカリキュラム表を収集・分析し、その現状が報告されると共に、現行カリキュラムの問題点等が指摘された。

3. 「校内テストの開発と改善のための試み」

東澤秀春（京都府立桃山高）

テスト作成原理等の知識を十分にもたないままテスト作成に関わってきている教師が多いという現実を認識し、テスト開発に要する基本的な知識や技術を踏まえながら、現実に即した開発手順を示したテスト作成マニュアルの試案が作成された。本発表では、テスト作成の問題点と留意点に触れながら、実際に取り組みされた校内テストの共同開発の手順とそのマニュアル化について紹介された。

4. 「日本における小学校英語活動支援のための研修」

小川一美（大阪教育大・院）

2001年に小学校英語活動支援のための教員研修が着手されはじめたものの、現場の英語活動に携わる学級担任に向けられた研究が限られている。その現実を

受け、本研究では、昨年大阪で実施された小学校教員のための英語活動の研修に対するニーズ調査を分析し、その結果が報告された。質問紙の回収率が低いことから、今回の調査だけでは、結果を一般化し研修案の作成を試みることは難しいが、今後の追調査による成果が大いに期待される。

ワークショップ

第1室

「より良い英語教育に向けての認知的言語研究」

宮下亜矢子（京都教育大・院）、平井朋美（京都府立西舞鶴高）、呂 佳蓉（京都大・院）、菅谷和沙（神戸学院大・院）

本ワークショップでは、現在認知言語学やその関連領域で研究を行っている4人が、それぞれの研究分野から英語教育への提言を行った。宮下さんは、学校文法では説明できない言語事象の例を挙げ、認知言語学の構文文法理論と、それに基づく言語習得論を紹介した。そして、関連した場面を想定した上で言語表現を提示する重要性を示唆した。平井さんは、発表者の中で唯一の現職教員としての立場から、認知言語学の視点に基づいた二重目的語構文と前置詞付与格構文の指導に関する発表を行った。教師が機械的に文型だけを提示するのではなく、生徒自らの発見的学習を促す指導例が提案された。呂さんは、オノマトペの象徴メカニズムについて最新の研究成果を報告した。オノマトペを単純な擬音表現と捉えず、比喩の意味拡張の側面からも分析し、「英語感覚を培う」方法についての提案があった。菅谷さんは、最も人間に近いとされている類人猿に対する言語指導の具体例を挙げ、過度の誤り訂正の問題点等トップダウン的な指導の問題点を挙げ、発見的学習への転換の重要性を提言した。言語学に携わる人々が、このように英語教育の領域を視野に入れて研究した上での発表を行ったという意味で、大変貴重な2時間となった。あとは、実践する人々が、いかに実際の授業に取り入れていくかが重要となるだろう。

報告：木本昌光（京都教育大・院）

第2室

「教師が変わる授業研究の実践方法」

玉井健（神戸市外国語大）、泉恵美子（大阪商業大）、吉田達弘（兵庫教育大）、今井裕之（兵庫教育大）

小関静枝（三木東高） 山本真理（兵庫工業高）

このワークショップでは反省を重視した「反省的実践家」の育成を目指すアクション・リサーチの研究手法についての発表がなされた。

前半ではこのアクション・リサーチの中核とも言える inquiry と reflection を中心にアクション・リサーチそのものが解説され、その重要性が語られた。内面に批判的な自己形成を図るための具体的な手法としての journal writing と interview についての説明の後、それぞれの手法によるアクション・リサーチを実践された高等学校教員から事例報告があった。アクション・リサーチを継続することで見えてきたものとして、授業の問題の特定、気づきなど自己を直視して内省することで得られる重要な内面の変化が挙げられた。

後半では玉井氏が参加者の 1 人を相手としてのインタビューのデモンストレーションが行われ、それに引き続いて参加者がペアになっての模擬インタビューの研修を行った。インタビューの手法はカウンセリングに似ており、相手の言葉を繰り返したり、言い換えたりするテクニックについての言及もなされた。

最後に、アクション・リサーチが単に問題の解決・改善に向けての技術論に終わるのではなく、教室での難問から出発し、教師の見方、教室の理解につながるような、英語教師の力量形成に貢献できるものとなることの重要性を議論し、まとめられた。

報告：嶋林昭治（龍谷大）

第3室

「高等学校英語 の授業の大半を英語で行うための工夫」

溝畑保之（大阪府立鳳高） 平尾一成（大阪府立門真なみはや高） 藤原和美（大阪府立羽曳野高）

全英連大会での授業実演プロジェクトをふまえた発表。最初に藤原氏が、日本語を使った文法訳読指導から、英語を使って英語を教える方式への転換の必要性を概観した。英語を使った授業の成立に関しては、Exposure / Use / Motivation / Instruction (Willis 1996) , MERRIE (Model, Example, Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion, Reward) (渡邊 2003, 鈴木 2004) などの観点に考慮する必要がある。

次に溝畑氏が『Main Stream』の”In a New York

Minute”を使った授業実践を行った。本課は、時間意識に二つのタイプがあることを紹介した上で、NY や大阪といった時間に追われる大都会の様子をまとめたものである。実演者は、最初にエレベータ操作盤の図版を使い、「閉じる」ボタンを押すかひとりでに扉が閉まるまで待つかを受講者に問いかけ、本課の基本となる問題意識を植え付ける。その後、アイキャッチングな図版（NY で列を並ぶ人の気を紛らわせる queue hostess、大阪の広口硬貨投入口）を見せて関心を引きつけた後、キーセンテンスの暗唱を行わせる。そして、教科書本文を CD でリスニングさせながら、両都市の忙しさを表す箇所にマーキングを行わせる。また、フレーズ単位の音読やシャドーイング（ポーズなし ポーズあり）によって英文理解を促進する。その後、（ペアワークの目的と有効性を講師に確認させた上で）ペアと組み、相手の顔を見て音読する練習を行う。また、本文内容について、互いに質問を出し合う英問英答アクティビティを行う。

上記の授業実践について、平尾氏が注意すべき点、実際の現場での展開の工夫などについて解説を行った。また、こうした指導実践の成果が報告された。指導前と指導後では、上位群・中位群・下位群ともに成績に有意な伸びが確認されたという。

様々なアクティビティにオーディエンスを巻き込むなど、非常に実践的な内容であった。「明日の授業ですぐに役に立つ」指導のコツと、それを支える学問的知見の紹介をまじえた本ワークショップは、多くの参加者に刺激と感銘を与えたものと思われる。

発表の後、ペアワークにおける互いの視点をあわせる方法、パラレルリーディングにおけるポーズの有無の違い、日本語使用の位置づけ、実践導入前後の違い、入試などの下線部訳を解く能力がつくかどうか、（辞書引きなどを教えないので）学習者自立性を損なわないか、指導体制の組織化、日本語/英語をかためるべきか、教員英語力アップの方策について、などの諸点について活発な質疑応答が行われた。

報告：石川慎一郎（神戸大）

第2日 5月29日（日）

研究発表・実践報告

第1室 司会・報告 横川博一（神戸大）

1. 「名詞の可算性に関する認知的アプローチ」

鷲見俊幸（向島中）

外国語学習者にとって名詞の可算性の習得は、冠詞とも絡んで重要だが、難しい。名詞の可算性の問題を、統語・意味的側面を区別し、母語話者のデータに基づき、認知言語学的に考察された。こうした概念形成がどのような指導によって可能になるのか、今後のご研究を大いに楽しみにしたい。また、動詞の他動性との関係も論じられた点も大変興味深かった。

2. 『ジーニアス英和辞典(第3版)』検索システム：名詞の場合

秦 正哲（流通科学大）

英文解釈をしていて名詞の語義・訳語を辞書検索する必要性が出てきた場合、どのような検索プロセスが行われうるかをフローチャートで示された。その上で、辞書編集者に対する要望が述べられた。理論的には精緻化すべき点があるように思われるが、辞書検索のプロセスを明示化するという試みは辞書指導にも役立つかも知れない。参会者がきわめて少なかったのは残念であった。

3. 「看護職に必要な語彙とは 看護学学術文献コーパスの分析を通して」

岡本清美（関西大・院）

看護学の分野では、英語文献・論文の読解が必要とされている状況に鑑みて、独自のコーパスを構築し、語彙分析を行った意欲的なご研究であった。テキストカバー率は West(1953)の GSL リストで約7割とかなり高かった。看護基礎教育で必要な語彙から看護学専門へといかに移行すべきかという枠組みでのご研究は、その成果を多くの人たちが望んでいるように思われる。

第2室 司会・報告 長谷尚弥（関西学院大）

1. 「リーディング能力向上を目指して - インターラクティブな授業の実践 - 」

小林香保里（立命館大・非）

速読力に代表されるような英語の実用能力偏重を見直し、学習者にとって真に意味があり、かつ学習者心理を考慮したリーディング指導を目指したグループ学習によるリーディング指導の実践報告である。興味ある題材についてグループで話し合うことで、積極的な授業参加、学習、幅広い理解が実現されたことがアンケート結果をもとに報告された。

2. 「読解および聴解において成績上位者はどのような学習方略を活用しているのか、に関する一事例研究」

森永弘司（立命館大・非）

生涯学習の観点から、自律した英語学習者育成のための効果的な指導法を探るための手だてとして、成績上位者が活用している学習方略を研究した結果が発表された。それによると、読解および聴解テストでの成績上位者ほど学習方略を活用していることが判明した。今後は特定の教材に取り組みさせる等、さらに焦点を絞った研究が期待される。

3. 「英語教育と国語教育の連携の可能性を探る - 日本人大学生を対象とした読解指導と教材編集を中心に - 」

五十川敬子（関西大・院）

諸言語に共通する「認知学習言語能力」に注目し、それを活用することで英語教育と国語教育の連携を図ることを狙いとした研究が紹介された。これまでに日本で行われている実践例とともに、大学1-2年生を対象とし、日英両語のリーディングスキル習得を中心とした授業展開例および教材例が紹介された。今後はこれらの知見をもとにした実践が待たれる。

第3室 司会・報告 中井英民（天理大）

1. 「中学生への自由英作文の指導に関する一考察」

占部昌蔵（兵庫教育大・院）

中学3年生を対象に、1回につき15~25分の自由英作文の指導を8回行い、その成果をプリとポスト・テストでの総語数比較により検証した結果が述べられ、自由英作文指導の効果が論じられた。特に、生徒の作文を全員で共有すること（ピアフィードバック）の意義と可能性が論じられたことは印象的であった。

2. Developing Content-based Materials for Paragraph Writing

佐々木典子（立命館大） 徳本 恵（京都文教高） 山藤ゆか（ベルリッツ）

ここでは、大学生向けの統合的なアカデミック・ライティングの教材作成が紹介された。環境問題を柱に、内容に対する関心と思考を深めさせながら、パラグラフの要素を導入し、作文へ導く構成をとっている。教材の完成度は高く、特に Graphic Organizer と Outline を書かせて作文に導く手法は、ライティング

指導をする際の参考になった。

3. 「中学生のスピーキング能力に対する振り返りの効果」

出場眞弓（兵庫教育大・院、高砂市立荒井中）

本研究は、中学2年生に絵を見せて Story Telling をさせる活動での、振り返り（Revision Talk）が2回目の活動に及ぼす効果についての検証である。実験自体は、振り返りに関して3グループに分けるなど複雑であるが、基本的にはペアによる振り返りの有効性が示唆された。発話指導への応用が期待される。

第4室 司会・報告 西本有逸（京都教育大）

1. 「励まし言葉」はどのように使われているのか： EFL 教室における使用実態と好みに関する調査

杉田麻哉（関西大・院）

本発表はEFL授業における「励まし言葉」の使用実態と学習者に好まれる使用法について調査したものである。主な分析結果として使用頻度が小学校>大学>中学校>高校の順に少なくなる、各学校とも学習者の間違いが重大なものでない限り訂正せず Very good!などの言葉が使用されていること、高校生は個人に対する励まし言葉を好む等が明らかになった。Teacher Talk の詳しい下位研究であり、今後、認知面と情意面の励まし言葉の関係、学習者の成績伸張との関係等の研究が期待される。

2. 「プロジェクト型学習に基づく英語学習の効果 - 動機づけと学力に注目して - 」

木下雅仁（名古屋大学教育学部附属中・高）

速水敏彦（名古屋大・院）

安藤史高（一宮女子短大）

中学校1年生時の学習意欲を減退させないためにプロジェクト型学習を導入し、実験群（教科書+プロジェクト）と統制群（他府県の中学校：教科書のみ）を動機づけと学力に注目して比較した研究である。精緻な統計処理の結果、実験群にはより自律性や自己決定のレベルの高い動機づけが形成され、学力面（特に英作文）の向上が確認された。＜基礎基本からプロジェクト型へ＞というベクトルは論議されることが多いが＜プロジェクト型から基礎基本へ＞という逆のベクトルが今後一層重視されるのではないかと司会者は感じた。

3. University Students' Attitudes toward

Language Learning: With Reference to Autonomous Learning

石川真美（京大・院）

The study argues the significance of autonomous language learning in order for university students to maintain and improve their English language ability. Based on closer examination of a questionnaire, clarified are the following: the majority of the students have introjection- and identification-based motivation, they also consider that language learning is a long process and that out-of-class activities are very important. Further research centers around interactions between teachers and students with the aim of changing their attitudes toward autonomous language learning.

第5室 司会・報告 鈴木寿一（京都外国語大）

1. 「リフレクション（内省）を促すためのポートフォリオプロジェクト」

徳永里恵子（兵庫教育大・院、兵庫県立香寺高）

これまでの学習を振り返らせる Language Passport、2)数個の話題について、英語で書かせる Journal、3)英語または日本語によって毎回の授業での学習を振り返る Learning Log、4)各自の学習への取り組みをファイルする Optional から成るポートフォリオの作成により、自律性向上と進歩を自覚させることを目標にした実践報告であった。学習者の変化を長期にわたる実践で明らかにされることが期待される。

2. 「英語授業におけるコミュニケーション構造理解のための枠組み」

今井裕之（兵庫教育大）

小中高での授業観察から得られた教師と生徒との対話分析を試み、英語授業におけるコミュニケーション構造理解の枠組みとして、1)コミュニケーションの三位相（「身体による対話」、「話し言葉による対話」、「書き言葉による対話」、2)メインフロアとサブフロア、3)「対話らしさ」の3つが提案された。教室でのコミュニケーションの在り方を改めるための理論的アプローチの構築が今後の課題であるとされた。

3. 「自己学習を促す Homework Assigning System

の構築に向けて」

高橋昌由（大阪府立山田高）

外国語学習は教室の学習だけでは不十分だという認識のもとつき、高橋氏が取り組んでこられた homework についての研究の簡潔な紹介後、Concurrent Study（授業との連携）、Learner-motivating Tasks、Comprehensive Assessment、Deliberate Assigning、Need-based Method（個に向けた取り組み）から成る Facilitative Homework の具体的項目についての高校生の回答結果が報告された。効果的な Homework を課すための示唆に富んだ発表であった。

第6室 司会・報告 佐藤恭子（プール学院大）

1. Correctness Scales for EFL

中西のりこ（神戸外国語大・院）

EFL 学習者の誤用を評価する上で、認知的観点から understandability と guessability という新しい基準が必要であることが提案され、データとして、英語母語話者が用いた評価にも、それが応用される可能性があることが示唆された。今後の誤用に対する考え方を変えうる斬新なテーマであると思われた。

2. 日本人 EFL 学習者の聞き返しの中でおこる「うなずき」と発話の関係

松村早希子（滋賀県立大・院）

会話分析の手法を用いた EFL 学習者の聞き返しの行動を、特に日本人に多用される「うなずき」に焦点をあてて分析された。ビデオによるデータ分析の結果、聞き返しと会話参与者、理解確認の機能、共起する発話の有無の関係が、明らかにされた。データ収集や分析に、苦労された様子が良く分かり、今後の成果が期待される。

3. Teaching English through Thai Culture by Computer

外山由美子（宝塚市光ガ丘中）

タイでの実際のビデオ収録を基にした、異文化理解へ向けての CALL 教材が紹介された。1年の準備をかけたこの教材は、題材としてタイの文化、日本の文化を織り込み、学習者が興味を引かれる話題を扱っており、また内容理解の問題も作成してある。まだ実際の使用が始まったばかりであるが、効果的な活用報告が待たれるところである。

講演

「使役文について」

高見 健一 先生（学習院大）

今回は使役文についてというテーマでの講演でした。前半は、使役動詞の意味についてのお話でした。make、get、let、have などは使役動詞として馴染み深いものですが、その意味や機能について詳しく説明していただきました。中でも、様々な意味に解釈される have についての説明は多くの用例を通して懇切丁寧に解説していただきました。使役文の意味的・機能的制約を要約しますと、以下のようになります。

使役動詞の make は、被使役主が「抵抗」する事象を、使役主が強制（的手段）により、被使役主に直接的に働きかけて引き起こす場合に用いられる。例えば、The devil made me do it./The lightning made the little girls cover their heads. では、悪魔や稲妻が、話し手や少女たちに直接的に働きかけ、当該の行為を強制して引き起こしている。

使役動詞の get は、被使役主が「抵抗」する事象を、使役主が説得したり、苦労・努力して、被使役主に直接的に働きかけて引き起こす場合に用いられる。例えば、After working at it for over two hours, they finally got the vault to open./He couldn't get the heavy chair to budge. では、金庫が開くことや椅子が動くことに「抵抗」があり、使役主は苦労・努力してそれらの行為を行ったことが示唆される。

使役動詞の have は、被使役主が「抵抗」しない事象を、使役主が社会慣習的な制御力による指示や、常套的な物理的制御力の使用により、被使役主に間接的に働きかけて引き起こす場合に用いられる。例えば、The coach had the players run for another hour. では、使役主が被使役主に対して一定の「社会慣習的な制御力」を持ち、使役主は被使役主に指示するという間接的な働きかけをし、それに対して被使役主は「抵抗」を示さないことが示唆される。また、The terrorists had a dozen bombs explode in front to the polling station by hiring teenage suicide bombers. では、使役主のテロリストが、爆弾を爆発させるのに、通例のきまりきった、つまり常套的な物理的制御力（コントロールできる力）を持っていて、

被使役主の爆弾は、爆発することに抵抗を示さず、テロリストは、自分たちが直接爆弾を爆発させたのではなく、10代の自爆兵を雇って、間接的に爆弾を爆発させていることが示唆される。

使役動詞の let は、被使役主が希望したり、自然にそうなる事象を、使役主が無干渉（許容、放置）により引き起こす場合に用いられる。例えば、John always lets Mary do as she likes./Mary inadvertently let the flowers droop.では、ジョンがメアリーの望むことを「許容・許可」したり、花がしおれるのを「何もしないで放っておく」という使役主の被使役主や使役事象に対する「無干渉」が示唆される。

講演の後半は、「同じ使役動詞なのに get だけなぜ to を伴うのか」という疑問に答える形でお話が進みました。Haiman(1983, 1985)や Newmeyer(1992, 1998)の「概念上・知覚上近い関係にある物は、音韻・形態・統語上でも近い位置に現れる」という考えを援用し、使役事象 被使役主の動作に対する使役主の関わり方(直接的か間接的か)に違いがあると述べられました。具体的には、I made/had/let the employee work.では、I と the employee は近い関係にあり、使役主が使役事象が起こる直接的引き金になっています。それに対し、I got/caused/wanted the employees to work.ではI と the employeesの間には必然的な関係がなく、使役主が使役事象が起こる間接的な引き金になっており、間接性が示される to が挿入されると考えられます。この直接性・間接性の考え方は、他の事象も説明できます。たとえば、He helped me climb the stairs by propping me up with his shoulders.と He helped me to climb the stairs by cheering me on.では、前者は肩で私を支えてくれるという直接的な手助けが示唆され、後者は「頑張れ！」と声援を送るといった間接的な手助けが示唆され、間接性を示す to が挿入されると考えられます。「形式が異なれば意味も異なる」というお話を聞いたとき、池上嘉彦氏の『<英文法>を考える』で読んだことや、Ross(1976)の直接から間接、無標から有標という「Me Firstの原則」を思い起こしながら興味深くお話を聞かせていただきました。

報告：藪内 智（京都精華大）

シンポジウム

「最近の言語研究を英語の学習指導にどう生かすか。」

司会・講師：織田 稔 先生（元関西大）

「中学生のための名詞の用法指導」

（認知言語学の立場から）

講師：赤野一郎 先生（京都外国語大）

「コロケーションとパターンに基づく語彙指導」

（コーパス言語学の立場から）

講師：山本英一 先生（関西大）

「場面から考える身近な表現と構文の指導」

（語用論の立場から）

3名のシンポジストがそれぞれの立場から英語学習指導への提言を行った。織田稔氏は「中学生のための名詞の用法指導」と題し、具体的な名詞指導の方法論を論じた。理論上、名詞には3つの現れの可能性がある（例：bus / a bus / buses）。この関係は従来明示的に指導されず、初学者の混乱を招く一因となっていたが、無冠詞ゼロ数形の名詞は「個としての形や固まりを持たない物質や運動・性質など、量状無形の物」を指し、不定冠詞形名詞は「意味対象が個としての形あるいはまとまりを持った物」であることを指す。また、複数形は、単にその物が2つ以上有るということよりも、その前提となる「1つ2つと数えることが出来るような形やまとまりのある物」を指す。英語学の研究成果と現場をつなぐ重要性について多くの示唆が示された。

赤野一郎氏は「コロケーションとパターンに基づく語彙指導」と題し、コーパス言語学の知見をふまえた語彙指導の方策について論じた。氏はまず、言語現象における「パターン」の重要性を指摘し、パターンを明示する上でのコーパスの有用性を指摘された。たとえば contrast をコーパス検索すると、そのままではランダムなデータの羅列であるが、ソート操作を行うことによってそこから in sharp contrast to という頻出パターンが浮かび上がってくる。コロケーションは意味と密接に関与したものである。critical の二つの語義の違いが後置前置詞の違いとして現れる例にも見られるように、語の意味の相違はパターンの相違によって識別され、逆にパターンの相違は意味の相違を暗示する。生成文法が言うように、バラバラの単語を

ブロックを積むように組み合わせて文が作られるわけではなく、各種のコロケーション・定型表現はそれぞれ自身が一つの単位として選択されている。grammatical pattern や collocational pattern への学習者の意識を高める上で、現場では語の用法や文型などの指導、および体系的な辞書指を行うことが有効であるとされる。

山本英一氏は「場面から考える身近な表現と構文の指導」と題して、語用論の立場からの英語学習への示唆を発表した。How old are you? は年齢を聞く表現であるが、親が(当然年齢を知っているはずの)子に対して言う場合は、「その年になってなんてことをするのか」という非難のニュアンスが生じる。つまり、語の意味は談話の状況に依存していることになる。ある言葉・表現を聞いて自然に頭に浮かぶ予測のことを「デフォルト推論」と呼ぶが、実際の談話ではこれが覆される場合も少なくない。たとえば、She didn't love him. In fact she hated him. という文では、love him と書いた段階で「hate というほどではないだろう」というデフォルト推論が成り立つが、次の in fact でそれが打ち消されている。英語教育においては指導者がこうした語用論的な観点を意識し、学習者に自然な意識付けをする必要がある。

理論と実践の間に橋をかける 3 名の講師の発表は刺激的なもので、英語教育の現場に立つものにとってきわめて多くの示唆に富むものであった。

報告：石川慎一郎(神戸大)

総会報告

嶋林昭治事務局長補佐の司会のもとで総会が開催された。最初、瀬川俊一会長より挨拶があり、続いて議長に玉井健氏が選出され、次の議題について報告および承認がなされた。

1. 2004 年度 活動報告(事務局長)
2. 2005 年度 活動計画(事務局長)
3. 2004 年度 決算報告(会計：岡良和)
4. 2004 年度 会計監査報告(会計監査：吉田晴世)
5. 2005 年度 予算案(会計：岡良和)
6. 2005 年度 役員(事務局長)

活動計画においては、来年度に第 10 回研究大会記念事業が行われるため、準備委員会を中心として、全会員が一致団結して大会を成功に導くべく決意表明

がなされた。また、新顧問として沖原勝昭氏(神戸大)が、新事務局員として石川保茂氏(京都外大)と杉森直樹氏(立命館大)がそれぞれ就任した。

2005 年度 関西英語教育学会 役員

会 長 瀬川俊一(京都府立大学名誉教授)

副会長 藪内 智(京都精華大)

名誉会長 安藤昭一(京都大学名誉教授)

顧 問

宮本英男(元同志社大) 織田 稔(元関西大)

齊藤栄二(関西大) 沖原勝昭(神戸大)

理 事

兵庫地区：今井裕之(兵庫教育大)

大阪地区：竹内 理(関西大)

京都地区：西本有逸(京都教育大)

奈良地区：中井英民(天理大)

和歌山地区：奥田隆一(和歌山大)

滋賀地区：清水裕子(立命館大)

紀要編集委員会

委員長 鈴木寿一(京都外国語大)

委 員 西本有逸(京都教育大)

溝畑保之(大阪府立鳳高)

事務局

事務局長 吉田信介(立命館大)

事務局長補佐 嶋林昭治(龍谷大)

会計：岡 良和(人間環境大)

学会ホームページ：石川慎一郎(神戸大)

会員名簿：倉本充子(広島国際大)

卒論・修論セミナー：赤松信彦(同志社大)

研究企画：石川保茂(京都外国語大)

規約改定：杉森直樹(立命館大)

会計監査

吉田晴世(大阪教育大)

吉田真美(京都外国語大)

(2005 年 5 月 29 日現在、敬称略)

紀要『英語教育研究』(SELT) No.28 発行

- 『英語教育研究』28 号編集報告と御礼-

まず最初に、28 号の発行が予定より大幅に遅れましたことをお詫び申し上げます。さて、28 号には投稿論文 10 編中 4 編が収録されることになりました。今回収録されなかった論文の中には、あと少しの改

善で掲載されるものがございました。査読委員の先生方のアドバイスをもとに加筆修正の上、29号に再投稿ください。最後になりましたが、ご多忙中、投稿論文を査読していただきました査読委員の先生方に心より感謝申し上げます。

(紀要編集委員会：鈴木寿一・西本有逸・溝畑保之)

新入会員 (所属・敬称略、入会順)

津島 桜、西村孝彦、橋本秀徳、堀池保昭、古川道子、前野恵美、中邑光男、木本昌光、松浦茂寿、松田早恵、池田あゆみ、伊藤美智子、小林永子、関川智子、高橋司、立岡佐織、田中星子、テラー・マーク、東川裕子、東田育子、福岡拓矢、藤原麻記、呂 佳蓉、山原望、谷口仁生、箱崎雄子、森川博幸、山内真理、柳瀬学、山本玲子、小川珠代子、長井千枝子、三木 望、野村剛史、林 智子、福智佳代子、佐古井准子、藤田真由美、開隆堂出版株式会社 佐藤彰良 (賛助会員)

第 31 回全国英語教育学会札幌研究大会

日時：2005 年 8 月 6 日 (土) ・ 7 日 (日)

会場：北海道教育大学札幌校

発表件数：130 件

第 32 回全国英語教育学会高知研究大会

日時：2006 年 8 月 5 日 (土) ・ 6 日 (日)

会場：高知大学朝倉キャンパス

Asia TEFL 第 4 回大会

日時：2006 年 8 月 18 金 ・ 19 土 ・ 20 日

会場：西南学院大学

テーマ：Spreading Our Wings: Meeting Our Challenges in ELT

第 10 回記念研究大会

日時：2006 年 5 月 27 日 (土) 、 28 日 (日) 予定

会場：龍谷大学 深草学舎 (予定)

内容：研究発表、講演、シンポジウム

滋賀京都大阪兵庫合同地区セミナー

日時：2006 年 1 月 8 (日) 予定

会場：交渉中

内容：研究発表、講演、シンポジウム

共催：L E T 関西支部 中学高校授業研究部会

第 10 回卒論・修論セミナー

日時：2006 年 2 月 19 日 (日) (予定)

会場：同志社大学 今出川キャンパス (予定)

発表申込締め切り：2006 年 1 月 10 日 (火) (予定)

発表原稿締め切り：2006 年 1 月 25 日 (水) (予定)

第 10 回研究大会記念事業

『英語教育研究』CD (PDF) 化

学会ロゴ募集

学会案内リーフレット作成

10 周年記念誌の発刊

会員名簿

個人情報の保護に関する法律 (平成 15 年 5 月 30 日法律第 57 号) の制定に伴い、従来の形式での名簿発行は取りやめ、Newsletter 4 月号に全会員の氏名と所属のみを記載する「簡易名簿」を発行させて頂くことになりました。これは、学会名簿がダイレクトメールや迷惑メールの温床となりやすく、そのため住所等の連絡先の記載を望まれない会員が急増していることが理由としてあげられます。何卒、ご協力のほどお願い申し上げます。

会員情報改訂のお願い

会員情報に変更がある場合は、同封の KELES 会員情報改訂用記入用紙にご記入の上、名簿係 (倉本) まで返送いただきますようお願い致します。

学会事業の電子化

移行期間を設けて学会事業を電子化する方向で進むことが総会において了承されました。将来的には Newsletter の郵送を廃止し、情報伝達の迅速性と経費削減のため、学会ホームページや Mail Magazine 等で、迅速且つ、きめの細かい情報を提供させていただきます。

発行：2005/10/07